

「おはん」 ★★★

2008（平成20）年10月12日鑑賞< DVD鑑賞>

監督：市川崑  
原作：宇野千代『おはん』（新潮文庫刊）  
おはん（幸吉の妻）／吉永小百合  
幸吉（古物商、おはんの夫）／石坂浩二  
おかよ（芸者）／大原麗子  
お仙（おかよの姉の娘）／香川三千  
おばはん／ミヤコ蝶々  
1984年・日本映画・112分  
配給／東宝

<吉永小百合と大原麗子の共演に注目！>

吉永小百合は1959年の『朝を呼ぶ口笛』から2008年の『まぼろしの邪馬台国』まで49年間で全113作の映画に出演しているが、その間たくさんの魅力的な女優が登場した。1969年から1997年まで30年近く続いた『男はつらいよ』全49作で、それらの女優を次々とマドンナ役として起用することができた山田洋次監督は監督冥利に尽きるというものだ。

『細雪』（83年）での岸恵子、佐久間良子、吉永小百合、古手川祐子の4人の美女の共演は特別だが、それに続く市川崑監督の『おはん』で、吉永小百合演ずるおはんの対抗馬となるのは、ハスキーボイスと純和風的な顔立ちが魅力の大原麗子演ずる芸者のおかよ。天下の大女優吉永小百合と女の意地を張って渡り合うのはやりにくいのではないかと心配したが、大原麗子だってすばらしい女優魂を持った大女優。女同士の火花の散る演技をしっかりと見せてくれるので、それに注目！

<こりゃ、ある意味ケツタイな物語>

『おはん』の原作は宇野千代だが、彼女が描いたストーリーはある意味ケツタイなもの。だって、夫の幸吉（石坂浩二）が芸者のおかよといい仲になったとしても、なぜ正妻のおはんが身を引き、別れなければならないの？そんな7年前のストーリーが示された後の現在の状況は、おはんは離婚して実家に戻り、幸吉は2人の芸妓を抱えて芸者家をやっているおかよに頼りっぱなしで困われているという情けない状態。

そんな小康状態に異変が表れたのは、ある日偶然出会ったおはんに幸吉が「会いに来ておくれ」と言ったところ、ホントにおはんが突然会いに来たためだ。映画冒頭に登場する、おはんが招き猫のようなしぐさで、遠慮がちに幸吉を手招きする様子が面白い。そんな「再会」を果たす中、幸吉との間の一粒種の息子悟がいることを聞かされ、また昔変わらぬおはんの美しさを再認識した（？）幸吉はたちまちおはんとしっぽりと・・・。

他方、おはんの方もダメだダメだと思いつつ、幸吉との違い引きの魅力に負けてズルズルと・・・。そんな社会的に認知されない爛れた男女関係（？）は世の中によくある話だが、ケツタイなのは元妻のおはんが正式に結婚もしていない単なる浮気相手であるおかよに遠慮して、コソコソと隠れて密会を重ねていること。つまり、その気になれば「ヨリを戻したから、幸吉をもらい受けますよ」と宣言しておかよから幸吉を奪い返せばいいだけだが、どうもおはんはそんなタイプの女ではなさそう。そのうえ、幸吉があんな風にどっちつかずの姿勢では・・・。

<石坂浩二のダメ亭主ぶりは絶品！>

『細雪』では石坂浩二は次女の幸子の婿養子貞之助役としてそれなりの役割を果たしていたが、『おはん』の石坂浩二演ずる幸吉は生活力のないダメ亭主の典型。そのうえ、あっちにいい顔、こっちにいい顔と二股かけの権化！

つまり、おかよには元妻のおはんとは会っているはずと内緒だし、最終的におかよの家を出て、おはんと息子の悟の3人で暮らすことにしたことも結局言えないまま。他方、おはんにはおかよの家を出て息子の悟と家族3人で過ごすことについておかよのオーケーをとったかのようなあいまいな説明を。こんな様子を観ていると、イライラさせられることまちがいない。これでは男1人、女2人の三角関係の清算ができないことは明らかで、問題は先送りされているだけだが・・・。

<2人のキーウーマンにも注目！>

この映画には脇役として2人のキーウーマンが登場する。1人はミヤコ蝶々扮するおばはん、彼女はおかよと幸吉に家を貸している立場。したがって、このおばはんの協力なしに幸吉とおはんの密会の継続はありえないのだが、なぜおばはんはそんなことにあれほど献身的な協力を？さらに、おばはんは、幸吉とおはんとの3人が親子水入らずで暮らす小さな家まで探してくれる親切さ。もっとも、こんな親切が最後には大ハプニングを生むことになるのだが・・・。

もう1人は、映画後半に登場するおかよの姉の娘のお仙（香川三千）。幸吉にしてみれば、おかよがお仙を一人前の芸妓に育てることに熱中していることによって、自分への執着が薄れていると勝手に解釈して、おかよの家を出て行く決心をしたのだが、さてそんな解釈の当否は？また、お仙は見かけによらず（？）したたかな女だから、要注意！

<五木演歌のこんな名曲を知ってる？>

私はカラオケ大好き人間。そのうえオールラウンドプレイヤーと自認している。カラオケ大好き人間は多いが、私に言わせればその多くは好みがワンパターンで、おじさんはほとんど演歌一筋。逆に若い男性はB'zやミスチルなど近時のヒット曲オンリー。ところが、私はナツメロから演歌まで、そして青春歌謡からフォークまで、さらに近時の若いアーティストのヒット曲、とりわけ女性アーティストの歌が得意という特異なレパートリーの持ち主だ。

そんな私が「これはうまい！」と心から絶賛し尊敬していたのが、五木演歌しか歌わないM氏。奥さんが経営しているカラオケ店でよく練習しているせいもあって、私に言わせればその歌唱力はホンモノの五木ひろし以上・・・？今から15～20年前にはよく一緒にゴルフに行き、カラオケにも行っていたが、その頃よく歌っていたのが、「おんな おんな 私はおんな」というサビが印象的な五木演歌。演歌は2、3度聴くとほぼ覚えらるから、私も時々歌っていたのだが、実はこれが『おはん』というタイトルで、この映画の主題歌だったと今回知ってビックリ！ちなみに、サビに続く歌詞は、

- ①髪のひとつじ くちびるさえも  
あなたの女でいたいよ
- ②声をころして すぐれば熱い  
死んでもあなたにつくしたい
- ③灰になるまで 男の胸に  
おんなは抱かれて夢をみる

というもの。女優吉永小百合が演じた「おはん」はこんな女なのだ。

<ラブシーンも好対照>

スカパーの「祭りTV！吉永小百合祭り」では、「さゆり伝説」の1つとして『おはん』における吉永小百合と石坂浩二との濃厚なラブシーンが話題となった。つまり、石坂浩二さんとの濃厚なラブシーンでは演技はうまくいったものの、衣ずれの音が大きく入ったため、関係者は「アフレコ」を提案したが、完璧を求める小百合さんが「もう一度やりましょう」と決断したらしい。たしかに、『おはん』における吉永小百合のラブシーンはかなり濃厚だが、この映画で吉永小百合にオンナを感じるのには、何と云ってもうなじの白さと美しさ。

他方、大原麗子も石坂浩二とのラブシーンがたくさんあるが、こちらは直線的で開放的。したがって、同じラブシーンでもあくまで抑制的な吉永小百合のそれとは好対照。そして、そこがサクリストの男性にはたまらないところ・・・？

<クライマックスは？>

『おはん』のストーリー構成の核は、幸吉をめぐるおはんとおかよの三角関係。しかし考えてみれば、前述のように元妻が愛人に隠れてコソコソと元夫と逢引きを重ねるといのは、かなりケツタイ。しかして、女の意地の激突の中、最終的に勝利を収めるのはどちら？というテーマになるのだが、映画はそれ以上に意外なクライマックスを用意している。

ある大事件の発生によって、結局身を引くのは耐える女おはんになるのだが、クライマックスは、そのおはんがおばはんを通じて幸吉に届けた手紙。あいにくその手紙がおかよに見つかったため、「隠すことなんか何もあるかいな」という幸吉の鶴のひとり声（？）によって、おかよがそれを読むことになるのだが、さてその文面は・・・？

『愛と死をみつめて』（64年）におけるミコの手紙には何度も泣かされたが、おはんの切々とした文面にもきつとあなたは涙するはずだ。